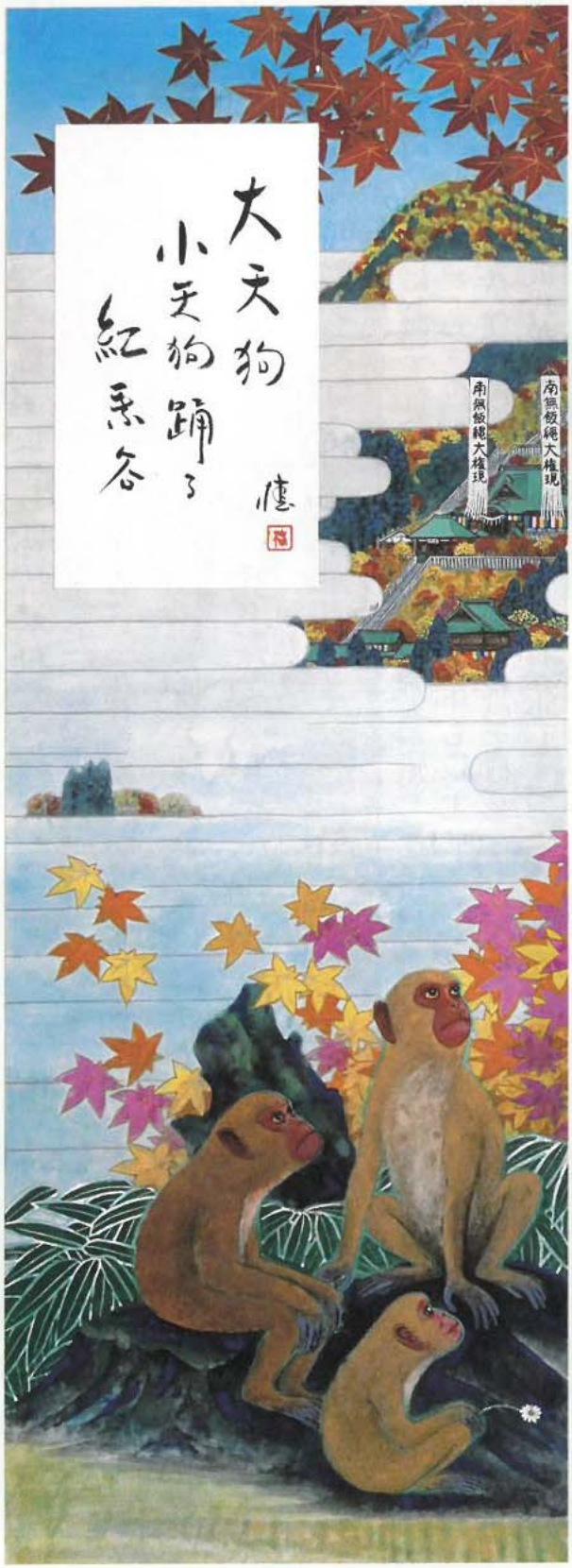
高尾山報 令和元年11月号 毎月1回発行 通巻第670号

高尾山報

令和元年 11 月号



「高尾天狗楓図屏風・紅葉」　画・橋本豊治

法の水茎 (89)

大正大学講師　髙橋秀城

十月中旬に東日本を縦断した台風十九号は、広範囲にわたって甚大な被害をもたらしました。まずは被害に遭われました皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

自坊の近くを流れる江川という河川も、深夜に氾濫しました。普段は穏やかな流れを見せる小川ですが、一夜にして河辺の風景を変えていました。土手を越えて田畑に水が入り、流れ着いた大木や藁、土砂などがビニールハウスを押しつぶしていました。

九月の台風に続いて被災された方も多くいらっしゃるかと存じます。心身ともに疲弊されていることと思いますが、まずはお身体を大切になさり、くれぐれもご無理をなされませんようお願いいたします。

令和元年十月二十二日、新天皇陛下の御即位を国内外に宣言する「即位礼正殿の儀」が皇居・宮殿において行われました。

当日は朝から雨模様でしたが、儀式が始まり、玉座「高御座」と隣の「御帳台」の帳が開かれた瞬間、雨は上がり晴れ間がのぞきました。天皇陛下は、皇太子時代の今年始めの歌会始において、「光」をお題として、

雲間より
さしたる光に
導かれ
われ登りゆく
金峰の峰に

という高校時代の登山の思い出を振り返られた歌を詠まれました。この即位礼での宣明を前にして、陛下と皇后さまに降り注がれた光は、あるいは陛下が心から願われた「世界の平和」へと続く「光の道」だったのでしょうか。たいへん神秘的なものでした。

わが君は
千代に八千代に
細れ石の
巌と成りて
苔のむすまで

（『古今集』読人不知）

（わが君は千年も幾千年も、永久に続いてほしい。小さな石が少しずつ成長して、大きな岩となり、その岩に苔が生えるまで）

国歌「君が代」のルーツとなった和歌です。幸せで平和な世の中が続くことを願いつつ、私たちも共に新しい令和の時代を歩んでいきたいと思います。

髙尾山は今、紅葉の季節を迎えています。「髙尾山十景」に選ばれた「弁天丸の谷もみじ」や「浄心門の名残のもみじ」も、皇后さまがお召しになった十二単のような艶やかなお姿と重なります。

短い秋をめぐる話は多いのですが、『大鏡』という作品には、百八十歳になる夏山繁樹という老人が、醍醐天皇（八八五～九三〇）との鷹狩の日に目にした、秋の盛りの光景を思い出す場面があります。

夏山繁樹は、「山の入口の狩場にお入りになると、天皇の鷹が、雉を捕まえたまま御輿の鳳の上に飛んできて止まりました。ちょうどその折は、次第に日が西の山の端に傾き、夕日がたいそう差して、山の紅葉が錦を張ったようでした。

鷹の色はとても白く、雉は鮮やかな明るい藍色のようで、その色の対比が素晴らしく、鷹は羽を大きく広げて止まっていました。それは雪が少し舞ったような、冬と秋の景物が取り合わされた風情で、このような美景が二度とあるだろうかと思われるほどでした。身に染むほどにしみじみと感動したので、どんなに罪を得てしまっただろう」と言って、指を弾指（爪弾き）しました。

（『大鏡』）

錦の山並みに鷹の白と雉の藍色を重ねながら、冬の風情を添えた秋の夕暮れが語られています。ただ、秋の頂点とも言うべき光景に感動を覚えつつ、繁樹はなぜそこに罪の意識を感じ、指を打ち鳴らしたのでしょう。

ここに見える「弾指」（「だんし」「だんじ」とも）とは、人差し指か中指の先を親指の腹に当てて音を立てることで、神仏への敬いや喜び、警告や許しなど、さまざまな意を表します。繁樹は、殺生戒を破った鷹狩で深く感じ入ったことに罪を覚え、禍を除くために指をパチンと弾いたのでした。

また「弾指」には、仏教語の「刹那」や「須臾」と同じように「きわめて短い時間」という意味もあります。指を弾く一弾指の間に、六十から六十五の刹那があると言われる無意識の瞬間です。その僅かな中に、あらゆるものが込められているのです。

一弾指の頃
去来今

（蘇東坡詩集）

（指を一度弾く間に、過去・現在・未来の三世がある）

秋は弾指のように、目にも留まらぬ早さで過ぎ去っていきます。色づいた紅葉も、やがて晩秋の疾風を知って散りゆくでしょう。もう二度と出会うことはない秋景色に抱かれながら、永久に変わらぬ「光の道」も探してみます。

（栃木北部教区普濟寺）

紅葉の髙尾山を参拝に多くの人が訪れる

台風十九号被災者の皆様に御見舞い申し上げます

東日本各地を襲った台風十九号による未曾有の水害や風害を受け、被災された多くの皆様に謹んでお見舞い申し上げ、災害により犠牲となり、お亡くなりになられた方々の御冥福を、心よりお祈り申し上げます。

そして、一刻でも早い復興と、平安なる日々が訪れますようご祈念申し上げます。

大本山　髙尾山　薬王院

中興俊源大徳忌法要厳修

十月四日(金)

奉祝　即位礼正殿の儀

天皇陛下の御即位を寿ぎ 特別開帳大護摩供厳修

十月二十二日、天皇陛下の御即位を内外に宣明する「即位礼正殿の儀」にあたり、薬王院において、「玉体安穏・宝祚長遠」を御祈念申し上げる特別開帳大護摩供が厳修されました。

法要は十一時の御護摩供において菅谷執事長御導師のもと、参列された御信徒の諸願成就と共に御祈念され、御札が御本尊・飯縄大権現様お側近くの内陣に収められました。

玉体安穏・宝祚長遠を御祈念申し上げました

高尾山内八十八大師巡拝

十月八日、高尾山内八十八大師巡りが行われ、前日の雨が上がり蒸し暑い中で、三十名以上の方々が参加されました。参加者は高尾山中を巡拝し、お大師様との御縁を結ばれた。

巡拝では先達の僧侶と共に高尾梅郷を通り抜け、山伏の「南無大師遍照金剛」というお大師様の御宝号と共に険しい蛇滝道を通る徒歩練行を行い、薬王院までの道中で各お大師様に法楽をあげました。

山上に到着し、大師堂周辺の八十八大師御砂踏み霊場を巡り、その後大本堂にて御護摩修行に参加されました。精進料理の昼食後には、一号路の各お大師様を山麓まで巡拝し、無事に不動院に到着しました。

山内各地のお大師様に法楽をあげる

大師堂前にて山伏と共に記念撮影

真言宗智山派管長
総本山智積院化主　第七十二世

大僧正 布施浄慧猊下晋山式

去る十月十六日、総本山智積院（京都市東山区）に於いて布施浄慧猊下が、真言宗智山派の管長と総本山智積院第七十二世化主に御就任なされたことを披露する、晋山式が厳粛に執り行われました。

布施猊下は大書院で「法流相承の儀」を行い、前化主の小峰一允大僧正から、猊座を受け継がれました。

金堂で行われた晋山傳燈奉告法要では、真言宗各派の管長猊下並びに川崎大師の藤田御貫首、成田山の岸田寺務長と共に、当山の菅谷執事長等、大勢の宗派関係者が見守る中、傳燈奉告文が奉読されました。

法要後には、ウェスティン都ホテル京都において晋山祝賀会が行われ、祝宴では成田山の橋本御貫首による御祝辞が述べられるなど、盛会のうちに無事終了致しました。

輿にお乗りになられる布施浄慧猊下

晋山式に参列された大本山・別格本山を始めとする諸大徳の皆様

折り折りの記 (123)

颱風は高尾の山を越えゆけり

波多野　重雄

紆余曲折の台風十九号は十月十二日夜、八王子市を襲った。翌日の新聞は、全国で河川の増水による堤防の決壊四十七河川、六十六ヶ所。避難者四千二百人、死者七十八人、不明者十五人と未曾有の被害が発表され、伊勢湾台風並みと報じられた。

八王子市の母なる川、浅川は警戒水位を超え濁流が橋桁を覗く夜のテレビに驚く。市役所付近は三九二ミリの水位。体育館に約七百人が避難した。翌朝、浅川橋の濁流は橋下を轟音を立て流れていた。

高尾山は台風通過による一号路の倒木と、蛇滝の水脈が変化した。私は昭和三十四年の伊勢湾台風に、一睡も出来なかった思い出がある。

（高尾山健康登山の会会長）

登高尾山（三）

今日天気晴
向山頂歩軽
永登高望遠
不知花鳥名

厚木市　荒井　一雄

高尾山を登る（三）

足軽し
鳥の名知らず
秋山路

今日の天気は晴れ…
山頂に向ふ足取りも軽し…
永らく高きに登り
遠くを望むも、
足下の花や小鳥の
名を知らず…

観音菩薩の宗教 ㉓

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

モンゴルの活仏とターラー信仰（そのⅠ）

昨年、この連載においてターラー菩薩について述べた（拙稿「観音菩薩の宗教⑪」）。ターラーは『法華経』「普門品」では観音菩薩の三十三応現の一尊とされ、チベットで膾炙した『二十一ターラーへの讃』では観音菩薩の慈悲の涙から生まれた菩薩とされた。多羅菩薩という漢字音写があるとはいえ、日本では広く知られることはなかったが、チベット仏教圏では観音菩薩に匹敵するほどの人気を博してきた女尊である。今回、ハルハ・モンゴル最初の活仏ザナバザルの信仰と仏像製作を中心に再びモンゴルにおけるターラー信仰を見てみたい。ハルハ・モンゴルとは、現在のモンゴル国に相当する北モンゴルをいう。

まず、それに先立ちチベット仏教圏とは何かを簡単に述べておく。インドで生まれた仏教はスリランカに伝わり、そこからタイやカンボジアなど、ヴェトナムを除く東南アジア諸国に伝播した。この地域の仏教を以前は小乗仏教と呼んだが、現在ではこれを貶称として退け、上座部仏教とか南伝仏教または南方仏教などという。

一方でインド大乗仏教はヒマーラヤを越え、東アジアの中国・朝鮮・日本、東南アジアのヴェトナム、内陸アジアのチベットやモンゴルに伝わった。それらは北伝仏教または北方仏教といわれる。このうちチベットに伝わったのは後期密教を含む大乗仏教で、それと同系の仏教は現在のブータンやネパール、インド領のシッキム、ラダック、モンゴル国と南モンゴル（中国内蒙古）、ロシア領のブリヤートやカルムィクといった広大な範囲に伝播している。

これらの地域の仏教は十九世紀のヨーロッパの学者により「ラマ教（Lamaism）」と命名されたが、それはチベット人僧侶がラマを深く尊崇する面を観てのことである。チベット語でラマ（bla ma）とは「上の人」「高き人」を意味し、サンスクリット語のグル（guru）の訳語として用いられる。グルとは尊者の意で、僧侶となる者の個人的な師匠をいう。インド仏教や中国・日本では、仏教徒としての最低条件は「三宝帰依」であった。三宝とは仏・法・僧で、仏教を説いたブッダ（仏）と、その教えの内容であるダルマ（法）と、それを実践する仏教教団のサンガ（僧伽）を指し、それに身も心もゆだねて尊敬することを帰依といった。他方、チベット仏教圏では三宝に師を加え、「四宝帰依」とでもいうべき思想と実践が起きた。そこでは、僧侶が出家時についた師匠に対する絶対的な師弟関係が求められる。ラマ教の名称はここから生まれたものである。ただしラマ教というと仏教以外の宗教の印象を与えるため、現在ではチベット・モンゴル仏教などと呼ぶようになっている。

弟子となった出家者は、僧院に入って学問の習得に励む。チベットやモンゴルの僧院は複数の寺院の複合体で、その形態は多くの寺院からなる比叡山に通じる面がある。そうした僧院内の寺院はチベット語でダツァン（grwa tshang）と呼ばれ、学堂ないし学問寺と訳される。ダツァンは英語ではカレッジ（大学）と訳されることもあるように、宗教施設でありながら学問の場であることが第一義である。それに対し法要をする堂宇も僧院にあり、ツォグチェン（tshogs chen）と呼ばれる。

チベット・モンゴル仏教の学問は五明と称する五つの学科に分けられる。五明の内訳は、内明（仏教学）・声明（文法学・音韻論）・因明（論理学）・工巧明（天文学・暦法・仏像仏画製作）・医方明（医学・薬学）で、このほか付随の学問として詩作法や占星術や演劇論などが別立される。現代に即していえば、学問寺は文系・理系から芸術系にいたる総合大学である。

入学した者はそれぞれの専門家から高度な学問を受け、学位の取得を目指す。最高の学位をチベット語でゲシェー、モンゴル語では転訛してゲプシといい、そこまでたどり着くのは入学者のごく一

部のうえ、二十～三十年を要する厳しい道である。

これらの僧侶の頂点には活仏が立つ。活仏とは生き仏で、仏がこの世で生きた僧侶として衆生に望んでくれるという信仰、制度をいう。活仏になれるのは、先代の活仏の転生者として生まれ認定された者だけであるが、活仏もまた高度な学問に励む。多くの活仏の頂点にはダライ・ラマがいて、観音菩薩の生まれ変わりとして熱烈な尊崇を得てきた。活仏思想はモンゴルでも受容され、清朝末期には南北モンゴルで二四三名跡の活仏が各寺院で転生していた（Walther Heissig, Die Religionen Tibets und der Mongolei. Kohlhammer. 1970）。このうちハルハ・モンゴル最高位の活仏はジェプツンダンバといわれ、初代から人民革命期の八世、民主化後の九世まで転生してきた。九世はチベット人で民主化後モンゴル入りし、二〇一〇年にモンゴル国籍を取得して翌年正式にウランバートルのガンダン寺で即位したが、二〇一二年に入寂した。ダライ・ラマの二〇一六年十一月二十三日の発言によれば、モンゴルにはすでに十世が誕生しているが、二〇一九年十一月現在、未公表である。

初代のジェプツンダンバはその名をザナバザルといい、日本の弘法大師のごとく仏教研究からターラー像製作などの仏教美術にまで多方面に優れた業績を残した。まさに五明全般にわたる教養を身に付け、それを発信した高僧であった。ザナバザルとはサンスクリット語のジュニャーナヴァジュラから来たもので「智慧の金剛」を意味する。彼は今日なお、モンゴル文化史上の代表的人物として尊敬され、モンゴル発見の恐竜の名称として二〇〇九年にザナバザルが与えられたほどである。

十七世紀初頭、ハルハ・モンゴルはチンギス・ハーンの末裔とされるトゥシェート・ハーン家が支配していた。一六三五年、ザナバザルはトゥシェート・ハーン家当代のゴンボドルジの子息として誕生した。ロブサンダムディン（Blo bzang rta mgrin 一六六七～一九三七）がチベット語で著した『黄金史』によれば、ザナバザルは四歳で受戒し、一六四九年にチベット各地の寺院で学び、五世ダライ・ラマや四世パンチェン・ラマなどにから灌頂を受けた。五世ダライ・ラマはザナバザルをチベットの大学者ターラナータの生まれ変わりと認定し、ジェプツンダンバの称号を授けた。一六五一年、ザナバザルはモンゴルに戻り、各地に寺院を建立し仏教を宣揚した。なかでもウルガ（現ウランバートル）は、もっとも重要な仏教の中心地に成長し現在にいたっている。

ザナバザルがターラーを深く尊崇していたことは、彼がターラーに関する著作や仏像仏画を多く残していることからも明らかで、その精神は彼の先代とされたターラナータの信仰を引き継ぐものと推定されている（Wallace, Buddhism in Mongolian History, Culture, and Society. Oxford Univ. Press. 2015）。モンゴルにおけるターラー信仰、またターラーの仏母としての観音信仰にザナバザルが果たした役割はきわめて大きく、次回はそのことについて述べることにする。

ザナバザル作と伝わる自画像。右上にダライ・ラマ五世、左上にパンチェン・ラマ四世を描く。モンゴル国立美術館蔵（The Eminent Mongolian Sculptor - G. Zanabazar, Ulanbator,1982.）

子供達の健やかな成長を願う　10月17日（木）

高尾山秋季大祭厳修

健やかな成長を願いお釈迦様へ甘茶を灌ぐ

横川幼稚園の園児による鼓笛隊の演奏

舞扇供養を行う八王子芸妓衆

侍装束の高尾山慶賛会の皆様

熱祷する菅谷執事長

練行の行列は長く続く

大本堂における御詠歌奉唱

大本堂で御護摩供に参加する稚児達

有喜苑において柴燈大護摩供厳修

葵の祈祷所

紀伊徳川家と高尾山 ㉜

明治大学博物館　外山　徹

藩士との交流Ⅲ

引き続き藩士との交流について。

紀伊徳川家の祈祷所として、その施主は歴代藩主だったが、殿様との直々の接点は、八代重倫から薬王院隠居湛玄に宛てた書状がごく例外的なもので、あとは儀礼としてのお目見えの機会くらいである。実際のやりとりは専ら藩士との間で行われていたが、その意味ではそこにこそ人間くさい付き合いの様子が感じられるのである。

藩士からの贈答

前回は佐野伊左衛門が大役を無事果たすことを飯縄大権現に祈願していたことを紹介したが、その書状の末尾には「繻子一巻これを進上いたしそうろう」と記されていた。「繻子」とはやわらかく光沢のある織物のことである。高級衣料生地なので高尾山に対する佐野の思い入れが感じられる。こうした贈答の事例からは、当時の一挙手一投足がよく伝わってくるので、いくつか取り上げてみたい。

浅井庄左衛門による四月八日付の書状から。

しかるはこの白羽二重一疋、甚だ粗相の品にござそうら得ども、折節有り合せ申しそうろう付き、幸便に任せこれを進上いたしそうろう。御持用にもあい成りそうらはば、千万大慶いたすべくそうろう。

羽二重の名は筬羽に経糸を2本通すことに由来する。「筬」とは反物幅に極細の竹ひごを簪子状に並べた織機の部品で、無数に並んだ竹ひごと竹ひごの間に反物幅分の経糸が通っており、前後させて緯糸を押し込む仕掛けである。通常一本のところ二本通すには糸は細く倍の数が必要で、織り上がった布地は薄手の高級生地である。「千万大慶」と言うくらいなので「甚だ粗相の」という表現は謙遜であろう。白羽二重の生糸は精錬と漂白による純白で、着物の裏地や下着に用いる。

かつまた、当地名物の加太浦若和布三十枚、これまた到来いたしそうろう付き進上いたしそうろう。宜しからざる物にござそうら得ども名物の儀にそうろう間

と、同時に地元加太浦のワカメが贈られている。加太浦は和歌山県の西北端、淡路島との海峡に面し潮流の速さで知られる。そのため天然のワカメは葉が分厚く歯ごたえがあり、現在も地元の特産品である。わざわざ「名物」と二回出てくるこだわりようなので、「宜しからざる物」というのもやはり謙遜だろう。

白羽二重と加太浦のワカメを贈る旨を記した浅井庄左衛門の書状

薬王院からの贈答品

一方、薬王院の側からはどのような品が贈られたのだろうか。二月二五日付の浅井の書状から。

年始お祝詞として御状の趣、ことにその御地産物の由にて嶋絹二反これを饋（＝贈）り下され、御心入りの御事どもかたじけなく存じ奉りそうろう

島絹と言えば八丈島産の絹地を指すが、「御地産物」とあるので八王子織物なのだろう。したがって、縞模様の絹地ということになる。「縞」とは経糸に複数の色糸を用いたストライプ模様の布地である。縞織の語源は南蛮貿易による「島渡り」に由るので字面としては浅井の表現が正しい。薬王院としても地元の産物にこだわったのだろう。

当時、着物地の縞柄は木綿がポピュラーだったが、絹の縞織と言えば仙台平などの袴地が浮かぶ。ここでは「嶋絹」という名称がわかるだけで、その織物がどのような生地であるかは不明だが、お侍向けには袴地のようなものを想像しておきたい。

続いて、これは年次が判明している安永元年（一七七二）十二月二六日付の浅井の書状から。

歳末の御祝詞として、その所の名産の炭御意掛けらるべき旨かたじけなく存じたてまつり

ここでも「その所の名産」とある。巨大都市江戸において燃料である炭の需要は大きく、周辺地域では名産の炭が知られる。房総方面から入る佐倉炭、西北方面から入る秩父炭などだが、高尾山界隈においても農家の副業として炭は盛んに焼かれていた。季節的にはぴったりの贈答品である。

さて、薬王院からの二件は年始と歳末の御祝詞という理由が示されており、佐野の場合も十二月二七日付なので、今で言う御歳暮ということなのだろう。祈祷依頼の間には定期的な贈答が行われていた可能性がある。

安永二年に山主秀興は権僧正拝任のため京へ赴いたが、その滞在中、浅井庄左衛門は重倫とともに和歌山へ帰国することになった。この時、秀興は「硯ふた一箱」を買って浅井への土産としている。これは、京土産であり、また、帰国にあたっての餞別の意味もあったのだろう。

村岡主従への土産

寛政九年（一七九七）に祈祷所再興を期して願い書を提出しに、村岡八蔵宅を訪問した際には白縮緬一反を手土産としている。細手の強撚糸による製織で表面にシボという凹凸ができ、肌ざわりがよいため下着にも用いられるが、晴れ着を仕立てる友禅染の生地に使用される高級織物である。白縮緬と言えば丹後縮緬が有名だが、現在の多摩織で縮緬と言うと先染め色糸によるお召織がある。寛政の頃には八王子も織物の集散地としての地位を確立していたので、先の縞絹同様これも地元の産と考えたいところだ。

この訪問に先立ち、村岡の用人林勝右衛門に主への取次を依頼する際には「上田嶋一反・帯地一筋」を贈っている。「上田縞」と言えば、現在は長野県上田市の上田紬の中の縞柄を指すようだが、江戸後期においては高尾山最寄りでも同名の織物が織られていた記録がある。「縞」は柄の名称なので素材はいろいろな可能性があるが、上田紬の事例から紬織と解釈したい。高尾山の最寄りでも古くから紬織は織り出されていた。「紬」とは生糸生産に適さないクズ繭から人の指先で撚り出した糸で織り上げた布地のことである。現在は結城紬など高級品だが、当時は農民にも着用が許された防寒用の日常衣料生地だった。ここでは、主人とその家臣で贈り物が違う点が面白い。もちろん絹縮緬は最高級衣料生地で紬織は日常用である。主従で同じものを贈るわけにはゆかないだろうが、当時の儀礼社会においてはこうした贈答品の選定には今日以上に注意を払っただろう。

仏画を所望

最後に贈答とは別の形でもう一挿話。

安永二年三月九日付の浅井の書状には、岡田作左衛門宛の書状一封と仏絵一幅を取り次ぐ旨を承知したとの追伸がある。

岡田は前年正月二二日の八千枚護摩供に代参で高尾山を訪れていたことがわかっている。この仏絵の届けはそれから一年以上経った後のことなので、たまたま代参に遣わされてそれきりではなく、岡田にとってはその後、仏絵を所望するような存在として、高尾山が意識されていたことになる。

浅井のように日頃から薬王院と音信を重ねた人物以外にもこうした動きがあることは興味深い。当時の人々の寺社に対する意識は、今日とはまた違ったものがあるだろうが、高尾山が何がしか紀州家の家中全体に訴求するものを持っていたことを推し量らせる。

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

東日本を襲った記録的規模の台風19号(9月12～13日)

高尾山に甚大なる台風被害

大杉原における土砂災害により杉苗奉納者の芳名板が破壊された

十月十二日の関東地方を襲った台風十九号は、東日本各地で甚大な被害をもたらした。

高尾山においても、十一日夕方から十二日の二十一時半過ぎまで、雨が降り続いた。八王子市内では各所で約四百ミリの降雨を記録し、高尾山麓の北浅川等で越水し道路が冠水し濁流となった。

台風が過ぎ快晴となった翌朝、山上及び山麓の様子を確認すると、一号路では道をふさぐ大木や、未だ流れ続ける水により通行できず、山上の大杉原では、土留めの石垣ごと杉苗奉納者の芳名板が土砂で破壊されていた。

蛇滝・琵琶滝の両水行道場においても、途中の道は落枝や倒木にふさがれており、特に蛇滝においては、多量の水により土砂や大岩が押し流され、道場全体を覆っていた。

御信徒の皆様方におかれましては、記録的な台風の為、復旧作業が難航して、水行道場の長期間の休止や、道路の通行規制等、多大なるご迷惑をおかけしましたことを、お詫び申し上げます。

参道各所が倒木で道が塞がれた

蛇滝水行道場では土砂や岩石が散乱していた

一号路では土が流され、地割れの如く見えた

高尾山環境保全基金協力会より御見舞金が届く

十月二十三日、都内のライオンズクラブの会員らで組織される**「高尾山環境保全基金協力会」**より、高尾山における台風十九号被害に対し、御見舞金を賜りました。

テレビ報道などで高尾山の被害の大きさを知った石井征仁会長（写真左端）、佐藤久牧事業部長と共に訪れ、菅谷執事長に御見舞金を手渡されました。

茲に謹んで御礼申し上げます。

菅谷執事長に御見舞金を渡す石井会長

高尾山季節散歩

暦の言葉
「七十二候」
金盞香
「きんせんかさく」
十一月十七日～十一月二十一日

「金盞」とは、冬に咲く「日本水仙」の花を指し、「黄金の杯」を意味する。雪の中でも花が咲くことから、「雪中花」の別名を持つ。日本では正月用の花として人気がある。

今月の風物詩
春菊

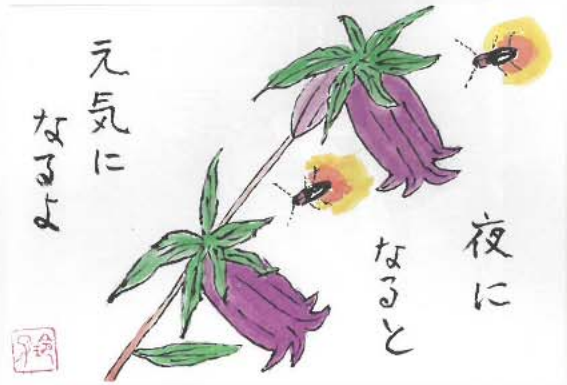
春菊の名は、春に花を咲かせ、葉の形が菊に似ていることから名付けられた。

すき焼きなどの鍋物や、天ぷらなどの食用に用いられ、特有の香りを持つ。咳止め効果があることから漢方としても用いられてきた。

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「ほたるぶくろ」

八王子市　栃谷玲子 様



一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

八十二段　**謙虚な心でいつも**

「謙虚」とは、傲慢にならずに控えめであり、出しゃばらずにつつましく、自分に都合の悪いことを受け入れられる素直さがある、といった意味です。ただし、控えめすぎるのは、「卑屈」にもなり得ますので、注意が必要です。

健康登山者投稿作品

木札の楽しみ

八王子市　えびさわ　しんいち

健康登山の楽しみにも色々ありますが、そのひとつが自分の木札との再会です。お山にいる自分の分身との再会がとてもうれしく、風雨に耐えてお山を見守るような姿が愛おしくなり、ついなでてしまいます。

木札に目印を付けられる方や、きれいに磨く方もいらっしゃいますが、日焼けして年季も風格も増した木札もまた素敵です。

自分の札を探している人を見かけて一緒に目をこらしてみたり、健康登山の方々との交流もまた良いものです。

それにしても数十回以上にも渡って満行された登山者の先輩方は素晴らしいものです。

木札に見守られ、木札に励まされ、これからも健康登山を頑張ります。

木札がある「満行者名一覧」

※木札とは、「成満木札」のことです。その木札は、御護摩受付所脇の「満行者名一覧」に満行回数に応じて、お名前が掲示されます。

第十四回高尾山健康登山 親睦会の集い

去る九月二十八日(土)、本年で第十四回目となる、高尾山健康登山親睦会の集いが行われ、百五十名を超える会員の皆様が参加された。

親睦会は波多野重雄会長による挨拶と、佐藤秀仁僧正による法話が行われて開始された。

昼食後には、津軽三味線演奏ユニット「春風」のお二人による演奏を鑑賞し、会場は大いに盛り上がった。

津軽三味線の音色に聞き入る

厄年を過ぎた御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたなら
一年・二年を
七十才を過ぎたなら
暑さ、寒さを
八十才を過ぎたなら
春夏秋冬を
九十才を過ぎたなら
一日・二日を
気を付けられ
日々を大切に
圓満にお暮し下さい

当山では皆様の（身体健全 寿命長久）を祈念して**福壽圓満**の御護摩をお申し受け致しております。

◎健康登山の皆様へ

高尾山報投稿の御案内

御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの心温まるお話を聞かせて頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※　**投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございますことを御了承下さい。**

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として、精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。

帳面……七百円
スタンプ…百円

おはなし散歩道

あかね茶屋

町田市　大澤桃代

ひなびた駅を降りた俺は、山を登り峠を目指す。夏、葉書が届き「あかね茶屋」の再開を知った。

あかね山の紅葉は見事なもので、その名の通りモミジやツタの葉が綺麗なあかね色に染まる。知る人ぞ知る絶景で、遠くから訪れる者も多い。

歩みは一向に進まなかった。もういい歳なのだ。

峠にたどり着いたとたん、茶屋から笑い声が聞こえた。隅っこに席を見つけて、「けんちん汁と握り飯」と、婆さんの背中に言った。婆さんとは古い知り合いだ。菊さんという名で、一人で店を切り盛りしている。

ほうじ茶を飲んで待っていると、団子や甘酒で一服していた客たちが出て行き、俺だけが残った。

「勘吉さん、お待たせしてすまんな」

菊さんが、けんちん汁と握り飯を持ってきた。名を呼ばれうろたえた。

「俺を覚えてたのか？」

「だって、勘吉さんは太郎さんの友だちだもの」

当たり前のように菊さんは言った。俺は汁をすすり、握り飯を頬張る。昔と変わらない味だ。

三年前、菊さんは連れ合いの太郎を亡くした。店を閉めたと聞き、山へは帰らないのだと思った。

菊さんが俺の横に座る。客足の落ちる時刻らしい。

太郎と俺は職人仲間だ。太郎が大工で俺は左官だった。仕事を終えてからも度々一緒に過ごした。

「菊さん、何で戻った？息子の家で暮らせばいいに。孫もいるんだろう」

菊さんの息子は町の役場に勤めている。

「好きなんだよ。店は通いで開けてるんだ」

「毎日山を登るのか？」

「もちろんだよ。勘吉さんがきてくれて、太郎さんも喜んでるよ、きっと」

「すまん。すっかり沙汰無しだったな」

俺は長いこと北の町にいる。太郎の訃報を知っても帰れなかった。

ふたり太郎の思い出話をしながら茶を飲む。

茶屋は、もともと菊さん親子三人がやっていて、太郎が婿入りしたのだ。五十年も前の話だが。

「俺が山にきていたのは、菊さん目当てだった」

ふっ、と菊さんが頷く。

「俺の気持ちは、見え見えだったってことか」

茶屋を訪れる男は、たいてい菊さんに惚れていた。帯や簪を持ってきたり、お大尽から使いがきたこともあった。俺だって一目惚れだった。しかも初恋だ。菊さんと眺めた日暮れの紅葉は、忘れられるはずもない。

菊さんが堅いだけが取り柄の太郎と一緒になったとき、俺はぶっ飛んだ。北の町までぶっ飛んだ。

派手な暮らしを好む菊さんではなかったが、茶屋を継ぐとは思わなかった。町場にはとうに電車やバスが走っていた。

「俺は金がなかった。だが太郎も同じだ。苦労させない自信はあったんだ」

ふふふっ、と菊さんが笑う。この笑顔に俺はやられたのだと思い知る。

「太郎さんは、店で働くわたしが好きだったんだ」

「何だ、のろけ話か？」

かもね、と菊さんが少女みたいな目になる。

あの頃、親たちも菊さんが町に嫁ぐことしか考えてなかったという。太郎は毎日山に登り、米をひき団子っ粉を作った。そうして、とんとん拍子に婿入りが決まった。

「太郎さんは、そば畑も作ってくれたんだ」

ほれ、と菊さんが裏口を開けた。一面にそば畑が広がっていた。そろそろ収穫の時期だという。

「畑を無駄にはできない」

菊さんは言って、店仕舞いの支度を始めた。

「勘吉さん、一緒に下りよう。あかね山が一等綺麗なのは日暮れどきだ。知ってるよね」

じきに日が落ちる頃だった。

（完）

（挿し絵・小出　茂）

高尾山物語 19

薬王院の荒廃

絵・橋本豊治

就中、本尊は雨に曝れ、烏鴉の屎尿に汚れ、鳶鴒蹂躙して傾く、終に鍋・釜の薪となるべきこと悲しむに余りあり、歎くに極まりなし

（武州高尾山薬師堂修造勧進帳案より）

『高尾山の歴史』外山徹　四十六頁

天正十八年（一五九〇）、高尾山を保護してきた小田原北条氏が滅亡し、徳川家康が関東の新領主として入府しました。

家康はこの時期に多摩周辺の寺社領安堵を行いましたが、薬王院の寺領が安堵されたのは、慶安元年（一六四八）という後の時代でありました。

寺領が保護されなかったこともあり、薬王院は苦難の時代を迎えました。その様子を伝える資料に、「武州高尾山薬師堂修造勧進帳案」があります。

この資料には、薬師堂が失われて本尊は雨ざらしとなり、僧の食事は果実と水のみというように、薬王院の荒廃・困窮の様子が記されております。

荒廃の直接的理由は不明でありますが、薬王院の再興は寛永期を待つことになります。

大きな夢が
生きがい生んで
皆々の
励み生む

院内散歩 33

～薬王院の展示物～

木版画『金閣寺の雪』
作・井堂雅夫

星まつり祈祷のおすすめ

星まつりとは、毎年順を追って巡りくる九星にお祈りして、災厄を除き福運を招くご祈祷です。

高尾山では、**冬至に星まつり特別大護摩供**を厳修して、御信徒各位の諸願成就を祈念しております。

又、当山の星まつりの御札は**飯縄大権現、薬師如来、不動明王**の三尊を始め、殊に**九星、十二宮、二十八宿**等の諸々の曜星を網羅した**星曼陀羅**を内符として納めたお札で、御利益は誠に深重であります。

多くの御信徒の皆様にお申込みを賜わり、広大無辺のご加護に浴せられますようお勧め致します。

※年齢は来年の数え年（来年の満年齢に一歳加える）

ご祈祷料はお一人様千円。特別祈祷料は二千円以上となります。申し込み締め切りは十二月八日、冬至の祈祷終了後、お札を郵送致します。

祈祷申込希望の方はご連絡下さい。申込書や高尾山の寶暦、振込用紙一式をお送りいたします。

※本年より祈祷料を改定させて頂きました。お間違えの無いようお願い申し上げます。

羅喉星	土曜星	水曜星	金曜星	日曜星	火曜星	計都星	月曜星	木曜星
凶運	半吉運	大吉運	半吉運	大吉運	凶運	凶運	半吉運	大吉運
此の星に当る人は運勢潜む象にして諸事慎まざれば災難あり家内他人に口舌事多しなお病難に注意を要す信心堅固にして慎むべし	此の星に当る人は運勢漸く開くの象にして諸事準備なさば花縫ふがの如くなれど怠らば災害事憂あり	此の星に当る人は幸運の象にして善業積めば目上の引立亦意外な利得あり口舌傷害などに注意すべし	此の星に当る人は運勢除るの象にして黒き雲の為に清き月の光も隠るゝ如く何か用心すべし	此の星に当る人は盛運にして万事順調に運ぶ像なれども慢心すれば大吉反て凶となる信心して加護を得べし	此の星に当る人は疲労困憊の象にして災厄病難等に注意すべし信心して堅忍自重を要す	此の星に当る人は万事憂え多き象にして諸事思ふにまかせず至て心労多く損失離別病災などに悩む信仰厚ければ除災光明を得る	此の星に当る人は進展の象なれど過ぎたるはなお及ばざるが如しにして余り過ぎるは災いの基である信心怠らず精進すべし	此の星に当る人は除災招福の象にして万事好都合に運ぶなれど細心の注意を欠くと損失あり目上目下の意見を聞き性急を慎むべし
七赤	八白	九紫	一白	二黒	三碧	四緑	五黄	六白
令和2年生	令和元年生	平成30年生	平成29年生	平成28年生	平成27年生	平成26年生	平成25年生	平成24年生
1	2	3	4	5	6	7	8	9
平成23年生	平成22年生	平成21年生	平成20年生	平成19年生	平成18年生	平成17年生	平成16年生	平成15年生
10	11	12	13	14	15	16	17	18
平成14年生	平成13年生	平成12年生	平成11年生	平成10年生	平成9年生	平成8年生	平成7年生	平成6年生
19	20	21	22	23	24	25	26	27
平成5年生	平成4年生	平成3年生	平成2年生	平成元年生	昭和63年生	昭和62年生	昭和61年生	昭和60年生
28	29	30	31	32	33	34	35	36
昭和59年生	昭和58年生	昭和57年生	昭和56年生	昭和55年生	昭和54年生	昭和53年生	昭和52年生	昭和51年生
37	38	39	40	41	42	43	44	45
昭和50年生	昭和49年生	昭和48年生	昭和47年生	昭和46年生	昭和45年生	昭和44年生	昭和43年生	昭和42年生
46	47	48	49	50	51	52	53	54
昭和41年生	昭和40年生	昭和39年生	昭和38年生	昭和37年生	昭和36年生	昭和35年生	昭和34年生	昭和33年生
55	56	57	58	59	60	61	62	63
昭和32年生	昭和31年生	昭和30年生	昭和29年生	昭和28年生	昭和27年生	昭和26年生	昭和25年生	昭和24年生
64	65	66	67	68	69	70	71	72
昭和23年生	昭和22年生	昭和21年生	昭和20年生	昭和19年生	昭和18年生	昭和17年生	昭和16年生	昭和15年生
73	74	75	76	77	78	79	80	81
昭和14年生	昭和13年生	昭和12年生	昭和11年生	昭和10年生	昭和9年生	昭和8年生	昭和7年生	昭和6年生
82	83	84	85	86	87	88	89	90
昭和5年生	昭和4年生	昭和3年生	昭和2年生	昭和元年生	大正14年生	大正13年生	大正12年生	大正11年生
91	92	93	94	95	96	97	98	99
大正10年生	大正9年生	大正8年生	大正7年生	大正6年生	大正5年生	大正4年生	大正3年生	大正2年生
100	101	102	103	104	105	106	107	108

高尾山報助成金志納者御芳名（順不同・敬称略）

前橋市 ㈲野口組
八王子市 田中武
札幌市 武田雄二
富士宮市 聖光院有彩
八王子市 倉石芳和
〃 大山泰
東村山市 小川芳男
久慈郡 早乙女和江
立川市 石田智恵子
郡山市 美濃部良
足立区 中山恵司
佐世保市 南長男
茅ヶ崎市 椎野佳子
伊東市 大江弘
八王子市 阿部ヨシ子
佐野市 荒居幸子
太田市 市川貴也
立川市 中島富美子
東久留米市 吉岡智代
行田市 渡辺宏
中野区 小杉和義
町田市 小平木喜
深谷市 今井晴子
高崎市 織田早苗
相模原市 小野沢浩平
豊島区 神山洋一郎
江東区 小宮一雄
塩尻市 澤田武彦
八王子市 橋本祐一
〃 守屋直
深谷市 田部井光男
木更津市 山口晴子
いわき市 新藤孝弘
邑楽郡 柳田稔子
八王子市 大神田久
〃 一般財団法人高尾保養院
中央区 吉野早苗
西東京市 馬場俊一
町田市 梅原良郎
新座市 柿沼孝行
春日井市 宮下一男
八王子市 金子喜美子
〃 落合義晴
港区 君島良一
〃 中川兼造
塩釜市 小齋祥子
さいたま市 大島美恵子
国分寺市 田中藤子
安中市 脇伊勢松
江東区 秋葉三重子
八王子市 池浦國秋
長岡市 猪川キクイ
板橋区 三浦泰
町田市 中嶋聡
深谷市 三宅ふじ
小平市 田澤照雄
八王子市 秋山重男
甲府市 丸山福栄
伊勢原市 佐々木晋介
前橋市 若林俊次
新座市 髙橋久子
大里郡 深田節子
鹿沼市 荒川昭巳
横浜市 佐藤安久
川崎市 谷口順和
練馬区 深谷薫
鎌倉市 堀嵜社
邑楽郡 井達立司
文京区 海老根有一
多摩市 古屋浩之
甲府市 清水慶子
柏市 石井康則
高崎市 萩原始
高知市 坂本敬子
練馬区 小山隆平
相模原市 中里暉久江
杉並区 本堂啓司
八王子市 ㈲島村電機
新座市 彰山粧麗
日野市 中西正夫
羽生市 岡戸信雄
立川市 熊添圭子
青梅市 田村勝子
墨田区 根岸欣司
比企郡 宮崎甚三
松本市 寺澤和男
行田市 岩崎薫
足利市 加藤清美
下野市 島崎善一
富岡市 茂原登
世田谷区 近藤徹
邑楽郡 髙橋冨美男
高尾山健康登山者一同

高尾山の昆虫 121

ウチワヤンマ

大型のトンボの一群であるヤンマは、雄大且つ力強さを感じさせると共に美しい色彩を持つことで知られ、高尾には多種のヤンマが生息します。

一般にヤンマは最速で飛ぶ能力を備えているとされますが、オニヤンマやムカシヤンマはヤンマとは科が異なり、さらにヤンマと和名が付いている中には、ヤンマでない種も含んでいます。

池などでギンヤンマと共によく見かけるウチワヤンマは、腹部の第八節に黄色と黒の円形の突起があり、これが団扇を連想させるのが和名の由来です。

大型で悠然と飛ぶ姿は正しくヤンマを思わせますが、実はサナエトンボの仲間です。

その証拠に近くで見ると複眼はヤンマのように大きくなく、左右の複眼が離れていること、及び水面に浮かぶ杭等に水平に止まることがサナエトンボであることを物語っています。（ヤンマは木の枝にぶら下げるように止まる）

高速で行ったり来たりするオニヤンマや池の周りをパトロールして飛び回るギンヤンマらに比べ飛翔能力が劣るウチワヤンマはすぐに止まって休むので目に触れることも多く、親しみやすいヤンマでないヤンマだと思います。

（文 松島　孝　撮影 上村　雅昭）

登山だより

■十二月行事日程■

一日～七日
聖天秘供(聖天堂)

十日、二十二日、
弁天様御縁日

七日
月例写経会
(十三時山麓不動院)

八日
釈尊成道会(仏舎利塔)

十日
御詠歌勉強会
(十時山麓不動院)

十三日
山内大掃除

十八日
おみがき

十九日
納札供養柴燈大護摩供
(十三時祈祷殿広場)

二十一日～二十二日
星まつり祈祷会
二十一日　午後五時開白
二十二日　午前六時結願

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
(九時大本堂)

二十八日
奥之院開扉供養
(十時奥之院)

三十一日
大晦日・二年参り

★お知らせ
十二月十三日は「山内大掃除」十八日は「おみがき」の為、午前中の御護摩修行は時間と場所を変更する場合がありますので、御了承下さい。

毎日のお護摩奉修時間
(11月1日～4月14日まで)

午前６時00分
〃　９時30分
〃　11時00分

午後０時30分
〃　２時00分
〃　３時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

新春特別開帳大護摩供

元旦御護摩札 申し込み御案内

令和二年元旦、午前零時より高尾山では、元旦特別開帳大護摩供修行が厳修されます。御信徒の皆様には、元旦に参拝されて、大本堂で執り行われるこの修行に参加されることを、お勧めしております。

また、御信徒様各位の都合により高尾山へ御来山頂けない方の為に、元旦御護摩札を郵送でのお取り扱いをいたしております。

元旦御護摩札のお申込みを御希望される方は、高尾山信徒課まで御連絡頂きますと、申込用紙をお送りいたします。同封されている返信用封筒に、元旦御護摩申込用紙を同封頂き、**十二月十日**までに必着するようにご投函頂きますよう、お願い申し上げます。

尚、元旦御護摩札の発送は、**一月三日**以降を予定しております。

■申し込み締め切り
十二月十日必着

■お問い合わせ先
電　話　〇四二-六六一-一一五
ＦＡＸ　〇四二-六六四-一一九九
高尾山薬王院・元旦御護摩係まで

訂正とお詫び

先月号「第十三箇度富士登拝修行記」中の十五ページ第二段二十六行目にあります、「浅間」の振り仮名の「せんげん」を「あさま」と訂正させて頂きます。

茲に謹んでお詫び申し上げます。

お知らせ

十月十二日～十三日に予定されておりました、「信徒峰中修行会」は、台風十九号接近の影響により中止致しました。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　菅谷秀文
編集人　渋谷秀芳
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月１回１日発行
１部50円

高尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp